

東京大学大学院人文社会系研究科

次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

派遣生の基本情報

氏名：舘 葉月

所属先：欧米系文化研究専攻西洋史学研究室（博士課程4年次）

派遣形態：平成22年度冬学期・個人派遣・大学院生

研究課題名

「第一次大戦後の連合国による捕虜帰還政策と対ロシア政策との関連性

—捕虜帰還問題の政治化・非政治化・人道問題化の過程—

派遣先での活動

（1）派遣先の基本情報

派遣先：フランス・パリ

研究機関：フランス社会科学高等研究院、フランス国立文書館、防衛省文書館、外務省文書館

指導を受けた研究者：ジェラルド・ノワリエル教授

（2）派遣期間

出発日：2011年7月1日

帰国日：2011年9月30日

総日数：92日

主な研究成果

（1）研究計画概要

フランス外務省文書館・防衛省文書館・国立文書館の史料探索を通じて、第一次大戦後、ドイツに抑留されていたロシア人捕虜並びに、ロシアに抑留されていた旧同盟国出身捕虜の双方向の帰還事業が、連合国の戦後政策とりわけ対ロシア政策とどのような関連性の下に遂行されたのかを明らかにすることが、本プログラムでの課題である。

(2) 研究成果

派遣者は、それぞれの文書館で博士論文に有用な史料を閲覧することができた。まず、外務省文書館では、政治・商業文書（1914 - 1940）Correspondance politique et commerciale の Série URSS において、ドイツからのロシア人捕虜帰還並びにロシアからの敗戦国出身捕虜の帰還に関する 1918 年から 1925 年前後までのまとまった外交史料を閲覧した。その中には、赤十字国際委員会とのやりとりもかなり残されており、博士論文における重要な視点を提供してくれた。続いて、防衛省文書館では、捕虜の管理や帰還を実際に担当した軍部の史料の中に、捕虜がどのように分類されていたのか、管理・帰還の現場ではどのような問題や困難が生じていたのかを明らかにする史料を発見した。これらを外務省史料と対照することで、さらに新たな論点を導き出すことが期待できる。国立文書館では、捕虜帰還問題が国際問題化し、国際連盟の下で審議されるようになった結果、各国がどのような形で協力したかを知る一助となる経済復興融資国際委員会 Comité international des crédits de relèvement économique の史料をまとまった形で発見することができた。

(3) 研究の展望

派遣者は、今回収集し閲覧した史料の分析を通し、第一次大戦により生じた大量の捕虜の存在が、大戦とは異なる対ロシア問題という新たな政治的文脈の中で問題化し、各国の利害関係のもとにその帰還が実行される（あるいは遅延される）過程を明らかにしていくとともに、そうした国際政治の中で国際法や赤十字国際委員会などによる人道組織がどのような役割を担ったかを解明する。そして、ナショナル/インターナショナル/トランスナショナル、並びに政治/人道といったそれぞれの要素が捕虜帰還にいかに関与し、その経験がその後の国際人道活動にどのように還元されることになったかを検討する。